

「アップサイクル」

調査機関などが実施したSDGs（持続可能な開発目標）に関する企業の意識調査の結果をみると、SDGsの認知度が高まる中、「取り組む必要性は感じるが、何から取り組んで良いか分からない」という回答が増加しているようです。

今回は、SDGsの観点から最近注目を集めている「アップサイクル」について説明します。

1. アップサイクルとは

アップサイクル（upcycle）とは、創造的再利用などとも呼ばれ、副産物や廃棄物などの不要とされるものを別の製品に生まれ変わらせることを意味します。再利用という観点でいえば、「リサイクル」「リユース」「リメイク」など様々な再生方法が既に存在しており、アップサイクルという言葉はあまり聞きなれない方も多岐かもしれませんが、アップサイクルの一番の特徴は、「元々の素材や特性などを活かしつつ、新しいアイデアを加えることで高い付加価値を付け、新たな製品を生み出す」という点です。なお、ダウンサイクルとは、不要な衣服で雑巾を作るなど、付加価値は下がるものの新たな使用価値を生み出すことを意味します。

	アップサイクル	リメイク	リサイクル	リユース
特徴	素材や特性を活かし価値を高めた新製品	元となる作品にアレンジを加えた同じ作品の作り直し	資源の状態まで分解し素材として再利用	不要な人が譲渡し、必要な人がそのまま再利用

2. アップサイクルの事例

食品業界では、フードロス削減に向けたアップサイクルに取り組んでおり、食品の製造過程で発生しゴミとして捨てられていた野菜くずやパンの耳などから、スナック菓子や飲料などが新商品として誕生しています。

ファッション業界では、古着のジーンズ素材・シートベルト・タイヤチューブなどを使用したバッグ、車などの部品で作ったアクセサリなど、様々なアップサイクル商品が次々と生まれています。また、ワークショップを通じて一般の方たちがアップサイクルを体験する取り組みも進んでいます。

3. 注目される背景

高度経済成長の社会では、新素材を使った大量生産が中心となる使い捨ての文化が定着していましたが、近年、地域社会・地域経済といった社会との関わり方や地球全体の自然環境に対する関心の高まりを受け、アップサイクルに注目が集まっています。

現在、ゴミを減らすための再利用はリサイクルなどを中心に取り組みが進められていますが、アップサイクルには新たなアイデアやデザインなどの工夫により製品の付加価値を高める効果があります。また、リサイクルと違い、大規模な設備投資の必要がなく素材の分解に要するエネルギーの消費自体を低減できるメリットもあることから、SDGsの一環としてアップサイクルによりサステナブルなものづくりに取り組む企業が増えています。

4. アップサイクルの実践

ここまで企業の取組事例を中心にご紹介しましたが、アップサイクルは企業に限らず地球に暮らすひとりひとりの小さな心掛けにより実践することができます。不要なものを捨てる前に一度立ち止まって何かに活用できないか考える。その小さな意識の積み重ねがSDGsの取り組みに繋がると考えます。皆さんも一緒にアップサイクルに取り組んでみませんか。

閑話ひとつ

- ▶「♪あ～らら こらら センセ～に いってやろ！」子ども（正確には「ガキ」）の頃、仲のよくない友達が何かをやらかしたのを見て、先生に告げ口する意思表示のために得意げに歌っていました。
- ▶実はこの歌、全国的に歌われていて地域ごとにさまざまなバリエーションがあるようです。福島は冒頭の「あ～らら こらら」が多く、国内でも主流派。岡山では「あ～らら…」の代わりに「わ～りんだ わりんだ」で始まるそうですが、これは福島でも聞いたことがあるような気がします。また「い～けないんだ いけないんだ」で始まる地域もあれば、「あ～らら…」と「センセ～に…」の間に「い～けないんだ…」が挿入されるロングバージョンもあるようです。
- ▶昨年、選挙違反で逮捕されても、無免許でひき逃げ事故を起こしても、なかなか議員を辞めない「センセ～」が問題になりました。もし今年もそんなセンセ～がいたら、みんなで声を合わせて歌ってあげましょう！
「♪あ～らら こらら、い～けないんだ センセ～ 国民に いってやろ！」 (MS)